

【世代のつながり】

この夏の埼玉研究会の研究テーマは「世代をつなぎ、希望をつむぐ」です。

生活教育では、その子どもを生まれてから死ぬまでの生涯全体の中でつかもうとします。大人になった姿や未来につくる社会に思いをはせます。さらには、その人生が大人の世代とつながっているととらえようとしてきました。

デューイ『民主主義と教育』も、第一章の生命の連鎖から教育の必要を解き明かしはじめます。梅根悟も、カリキュラム論の背景に、大人（長）と子ども（幼）がともに育つ「長幼一体社会」の再生を構想していました。子どもたちは大人といっしょに生活したり労働したりする中で「自然に」育ちます。大人にとっても、子どもの視線を感じながら労働したり暮らしたりすることは自らも発達主体として成長させる大事な支えでもありました。

しかしこのような長幼社会は、産業革命、資本主義化によってつながりを断ち切られ、一体性を失って

生活教育 キーワード

きます。授業や教育課程づくりは、この世代のつながりを意識的、自覚的につくりなおしていくとくみみでもあるのです。

教師の世代のつながりにしほつてみると、日本は年齢構成のいびつさで中堅世代の少ないことが団塊世代の大量退職によってあらわになり、ある種の文化断絶を引き起こしています。あの手この手の豊富な「教育のわざ」を伝えることも緊急の課題ですが、「こういうことはよくあることで大丈夫」というふんわりした子ども観を伝えることが大事です。年配のベテランはその根拠として、自分がかかわって大人に育った子どもたちの人生をあげられます。

「発達に定年なし」「生活教育に定年なし」。
(研究部・加藤聡一)

参考文献

- ① 梅根悟教育著作選集第六巻「コア・カリキュラム」明治図書、一九七七年（原本一九四九年）。特に第三章「古い教育と新しい生活教育」。
- ② 金田利子「生活主体発達論 生涯発達のパラドックス」三学出版、二〇〇四年。